

# 談話室



随想 秦郁彦氏講演

『明治維新一五〇年』  
「官軍」「賊軍」の視角から

松井和明 39社

講演のテーマは、明治一五〇年」を特に、「官軍」と「賊軍」というキーワードで説明していくこと。豊富な蘊蓄の中から、興味深い出来事を繰り出しつつ、明治維新とは何だったのかを紹介。就中、キーワード「官軍」と「賊軍」の視角で見ての具体的な二・二六事件や東京裁判の勝てば官軍という実績、錦の御旗」のトリックの決定的役割、官・賊を分ける目安としての靖国合祀、曖昧な合祀基準、明治天皇の戊辰は私戦という説や、幅広い融和策の実施、賊軍系子孫の靖国宮司―松永・徳川両宮司の言動等の解説で、興味深く、名講演を愉しんだ。最後に、西郷（せご）どん」の不思議に触れ締めくく。

維新とは何だったのか：仏・露革命などと比較、革命というには規模小、不徹底。結論が出せず、とりあえず「維新」と。しかし、英語に強い秦氏らしく、日

本語の「明治維新」＝英語で「Meiji Restoration (復元・回復)」＝邦訳「王政復古」という矛盾を指摘。

一五〇年、ハワイ移民一五〇年、東大・慶応大 創設一五〇年、漱石・子規 生誕一五〇年、安倍首相の明治五〇年の寺内首相、一〇〇年の佐藤首相、一五〇年の安倍」との長州出身自慢。

四文字熟語のスローガン「尊王攘夷」、  
「尊王開国」、  
「尊王佐幕」→「公武合体」  
↓「尊王倒幕」。明治になり「文明開化」、  
「富国強兵」→「和魂洋才」、  
「脱亜入欧」(諭吉)、  
「王政復古」。

キーワード「官軍」と「賊軍」二・二六事件は天皇も容認すると見た陸軍皇道派による反乱であるが、石原莞爾はどっちつかずの立場でいたが、天皇の討伐命令が出ると、東京の戒厳司令官として、どっちが正しいか、議論しても始まらない、勝てば官軍だ「以上」といった。東京裁判についても、勝てば官軍だ。負けたのだから受け入れもやむを得ないと考えられた。

「官軍」と「賊軍」の見分け方 戊辰戦争で使われた「錦の御旗」は、官と賊を分ける「倒幕のシンボル」となり、勝敗の決定要因となった。徳川軍は、戦力では官軍を大幅に上回っていたが、岩倉具視と大久保利通の詐術で作られたトリ

ック「錦の御旗」により「賊軍」とされた。発言権は、薩長土肥の順。明治政府の発言権は薩長が同格で第一位とされたが、土佐藩は、鉄砲名人・新島八重が活躍した？会津城攻めで大きな犠牲を払い、第3位に。肥前藩(佐賀)は上野の彰義隊への優秀な大砲の攻撃効果大と、第4位に。

「官・賊」不明と靖国合祀が目安 合祀には、①戊辰戦争の戦死者、②幕末・明治維新にかけて国家のために殉難した国事殉難者という二つのカテゴリーがあった。各藩推薦が進められたが、御所を攻めた薩摩が祀られ、守った会津が祀られない、長州は朝敵から外れるなど、官賊の判断が困難になり、大正以降落穂ひろいで会津ほか賊側も祀られ出す。

明治天皇の「官賊」融和策：戊辰戦争は東軍と西軍の私戦。西南戦争も西郷と大久保の私戦と判断。贈位、靖国への合祀、爵位の授与、賊側の高官への採用など、各種の融和策を講じる。西郷の子息を留学させ、取り立てる。慶喜に公爵授与、西郷の賊名を取り除くなど。

A級戦犯を「昭和殉難者」として合祀 日清・日露以降、対外戦死者の合祀は続いたが、国事殉難者は昭和一〇年で終了していた。松永永芳宮司(春嶽の孫、

宮内大臣・慶民の子)は昭和五三年、東条以下、14名のA級戦犯を天皇参拝も無理となるとの意見があるも、合祀を強行。

徳川康司の開けた「パンドラの箱」 徳川康久宮司(慶喜の曾孫)は、記者の質問を受け、「官軍」「賊軍」ではなく、西軍と東軍という呼び方にしたい。錦の御旗」を出され、「賊軍」にされなければ、徳川方が勝っていた」と。

西郷隆盛(せごどん)という人物：西郷は、不思議な人物である。昭和一三年、東大生の尊敬するNO1の人、内村鑑三の代表的日本人のNO1人気がある。明治維新は西郷の革命ともいわれる。では何をやったのかの実績は出てこない。わからないところが魅力なのか。

以上



# 書架



堀内進之介著 (集英社新書)

『人工知能時代を善く生きる技術』

2018年3月発行

虎長 39 経

人工知能などの新しい技術については、生活を豊かにすると期待する。待望論」と、監視社会の強化や雇用崩壊、人間らしさの喪失などの脅威論」とが存在する。どちらが正しいかを議論するのは不毛であり、技術とともに、如何に善く生きるか」と考えることが重要、と説く著者に、筆者は共感する。本書から得た教訓は、近代が前提としてきた「人間中心主義」を脱却して、技術による解放」のビジョンを示すことが大切である。

AIによる自動運転車は便利だろうが、事故の責任を明確にする法整備が必要である。現代のように商品の選択肢の多いと、選択する意欲を失い、利用のパーソナルデータ分析によるリコメンド情報に頼る「フィルターバブル」に埋もれるので、自分好みでない情報も無視しない態度が必要だ。

① 技術的特異点(シンギュラリティ)は起こらない、

② 技術は人間を支配しないが悪い影響を及ぼしうる、

③ 従って技術を賢く活用して社会を善くしていくべきである、という本書の内容には説得力があった。

なお筆者は、人工知能の脅威としては、仕事を奪われることよりも、車・医療・兵器に組み込まれた場合がより深刻と思う。その意味で、小林雅一著「AIが人間を殺す日」(集英社新書2017年7月発行)の一読をお薦めしたい。以上

半藤利一著 (幻冬舎新書)

『歴史と戦争』、『歴史と人生』

2018年3月発行

慈海 39 社

半藤氏は、本年来寿を迎えたが、本書は、半藤フアンのかつてのベテラン編集女史が、全著作80冊以上を読み直し、厳選した珠玉の言葉を「歴史観を歴史と戦争」人生観を「歴史と人生」新書版2冊に凝集、紹介した半藤氏の業績の記録である。半藤氏は坂口安吾を継ぎ「歴史探偵」を自称するが、今月の

新三木会講演者・実証史家の秦郁彦氏によれば、80数年前より、毎月、秦氏や保阪正康氏らと懇親会「歴史探偵団」を続けており、その「探偵団長」に任命されているという。

『歴史と戦争』: 幕末・明治維新からの日本近代化の歩みは、戦争の歴史でもあった。日本民族は優秀との驕りのもと、無責任な権力者は暴走、戦争に突き進み、メディアはそれを煽り、国民も熱狂、権力者は責任を取らず、国家は破綻した。その戦争が歴史となった。今、「積極的平和主義」や「集団的自衛権」に新たな戦争を憂慮する。歴史に学ぶことは難しい。

本書の言葉より: 勝海舟は日清戦争に反対、日本の大間違いの戦いである。かえって朝鮮半島が他の国の餌食になる。むしろ清国とは日本の貿易・商業すべて、5億の民は日本にとって最大のお客さんである」と。「一億総懺悔」という言葉の中に、皆が悪かったのだから責めるのはよそう。国民が考えないようにするトップ層の戦前戦中と変わらぬ国民指導の理念が垣間見える。

『歴史と人生』: 歴史は究極の人間学でもある。憂きことの多い日々をどう過ごすか、秘匿した苦悩を見て敬愛した昭和天皇、「天」に任せた武力否定

の海舟、義理の祖父で「愚」に徹した大好きな漱石、戦時も泰然と生きた荷風、「墮落論」に衝撃を受けた安吾などの生き方に学び、歴史研究で出会ったリーダー・組織、人間の愚かさ、こぼれ話、折々の所感、などを紹介している。

本書の言葉より: 歴史の面白さは、万事人間が作ったものであること。人間が何を考え、どう判断し、どのように動くか、どんな間違いを犯すか、そのもの。だから、歴史とは人間学である。原発をほとんどおつ建て、どこかに一発か二発攻撃されるだけで放射能で押しまい、武力による国防なんて土台無理なんです。

秦郁彦氏との比較: 今月講演 明治維新150年」で論点となった3点についての半藤氏の見方、①明治維新とは、何か、②西郷隆盛をどう見るか、を紹介しておきたい。尚、錦の御旗は、秦氏同様、大久保によるトリックと。明治維新は、薩長による権力を狙う暴力革命である。その名残が、明治10年の西南戦争まで続いたもの。新政府軍が倒して西南戦争が終わるまで幕末である。西郷隆盛は、毛沢東だ。共通点は、詩人、金・地位・名誉はいらない、良い語録を残している、農本主義者、永久革命家であると。以上